

思想

I 思想と人格

I 思想と表情

- (1) 心情の美は必ず顔形に反映する
- (2) 思想と表情の關係
- (3) 顔貌は精神の現れ
- (4) 大脳皮質から見た悟りの生活と長寿の秘訣
- (5) 二つの神経系環境神経と生命神経系
- (6) 知覚と表現
- (7) 二つの生命 生物学的生命と生理学的生命

I 思想と人格

人の考への根底を支配しているものが思想である。而してその思想の善悪を判定するものは実には大義明分である。その大義明分に叶はぬものは如何に理屈をつけても我が日本では通用せぬ、世界広しと雖も我が日本以外の国にははつきりした大義明分はない。それで色々勝手な思想が生れて来るのであるが、日本では日本精神文が許されるもので諸外国のように思想の穩健も中正もない、只正邪あるのみである。その思想即ちもの考へかたの根底に間違いがあると何を云つても間違つて来る。日本精神がなければ今日の総ての出来事に就て、日本人としての正しき判断正しき認識理解を為し得ないで、或は露西亞人

思想

富田朋介

式に或は英国人式に物事を判断しそれを正なりと信ずるようになり、国内の出来事に対して正邪曲直の間違つた判断をするのであり、世の中は混乱に陥るのである。

嘗て大正十二年の関東大震災の際、大杉栄氏の妻女が憲兵隊に呼ばれて取調べを受けた時、「あなた方と私共では思想が違うから物の考え方が百八十度違つており、あなた方が正しいとお思になることは私共から見れば正しいのです。又あなた方が悪いと思われることは私共から見れば善いのです。そう云う訳でありますから此処で如何に話し合つてもお分りになりますまい」と云つたとのこと。そう云う風に思想が違つて居ると考えと云うものは一つも合わない、それで先づ一番最初に絶対に統制しなければならぬことは産業よりも何よりも思想で

一

ある。

他のことは全部派生の事項であつて漸次に統制されて来るのである。而もこの思想病者は色盲と同じで、自分が思想病に罹っていることに気附かずして他の無病のものを悪思想と思つていたので一番危険で困り者である。

日本人は思想と人格とを混同して考えるくせがあるが、これは全然別のものである。彼の共産主義の元祖であるレーニンの如きは今日のいづれの政治家よりも人格としては立派な人である。乍然彼は共産主義を以つて祖国の露西亞を救い、更に全世界人類をも救い得ると云う思想を持つていた処に、吾が日本の国体詰り日本精神とは根本的に相容れざる所があるから、吾々日本人としては絶対に排撃せねばならぬのである。

人格が立派で識見、力量が大で思想のないものはこれが一番危険である。つまり自動車の機械が立派でハンドルがない訳であるから、何時危険に頻するか分らない。思想は丁度船の舵に当り又人間処世の道しるべである。船に舵なくして進む時は、その機関の馬力が大なれば大なる程危険の度合が大である。

Ⅰ 思想と表情

(1) 心情の美は必ず顔形に反映する

凡ゆる精神活動は、大脳の外表を蔽う所謂大脳皮質を作る百四十億許りの神経細胞の機能である。この神経細胞の働きによって、今日の文化が創造され又将来より一層高度の文化も期待されるものである。

吾々はともすると顔形の外景面の美醜を気にする。特に女性にあつては強くこれを気にやむものであるが、この顔形の美醜は生れつきの即ち遺伝的のものであれば、これを変へることは殆んど不可能である。反之心情の美はその人の心の修養如何によつて変え得るものである。今その好例を挙げて見よう。

世界中で一番の美人として定評のあるのは、「コーカサス」の少女である。黒い髪の毛でノーブルな気品のある顔立ちで不思議な魅力ある眼をしている。その歩く姿は優美で全く男性の心をうっとりさせ仕舞う。それにも拘らず、彼女達の美はしばみ去ることが非常に早い。青春と共にその美は失われ、その眼は輝きを失いその乳房は緊張を失つてしばんで仕舞う。詩人ジョシアは「天性の美に恵まれたコーカサスの少女の早くその美花を散らして仕舞うのは、心の教養と英智をもたないからである」と云う。このことは吾々日常屢々経験する処で、心情の美は必ず顔形に反映するものである。

(2) 思想と表情の關係、心に優しい愛を包んでいる人には自ら愛敬の魅力があり、清純の思想にもえている人の瞳は澄んでいる。心の教養をもたない外形の美は単なる人形の美に過ぎない。外面の修飾だけに腐心して、精神の美を培い育てることを忘れた人はあわれむべきである。眞の魅力ある美は独り身体の美だけではだめであつて、これに高い情操を欠ぐ時は多くの場合男性への魅力を失つて仕舞うものである。みだりに犯し難い気品は、心の培いを忘れない女性丈が持つものである。要するに形態の美は主として先天的遺伝的のもので、「コーカサス」の女性はその好例である。然し表情はその人の心の状態で変

ってくる。ではこの思想と表情の間には如何なる関係があるのであるか。

顔には色々沢山の筋肉が附着している此の顔面の筋肉は、これを二群に分けることが出来る。その一は咀嚼筋群で今一つは表情筋群である。而してこれらの筋繊維の一本一本には、脳から出ている神経の末端が分布している。咀嚼筋には脳神経のV即ち三叉神経の運動枝が、表情筋には同じく脳神経のⅦ顔面神経が分布している。これらの神経の働きは思想や意志に依存する。それで凡ゆる思想と表情とはその特殊な「メッセージ」を筋繊維に伝達して、それに相当する表情を其処に刻み出す。この筋への思想伝達の結果が表情となって現われるものである。晴やかな心、あてやかな情緒は無意識の内に顔面の筋肉に「メッセージ」を送り、筋はこの神経の刺激によってそれに応じた表情を現わすこととなる。しかもそれが不断にくり返される時は、これが顔の個性となって仕舞うのである。それ故に心に柔軟性があり張り切っている人、あてやかな情緒に浸っている人は磁石の様に人を引きつける魅力をもつものである。

思想はその表現を顔面に現わす許りでなく、顔面の形態そのものも変える。筋の運動は常にその運動する筋へ血液の流れを誘致し、血液の増加は筋の形を大きくするものである。それ故表情とは習慣的に用いられている或筋肉の働きに外ならぬものであって、その根底を為すものは思想と云うことになる。

かの有名な「カント」も表情が精神に及ぼす力のあることを説いて「顔形の快活さと陽気さとはゆっくり心そのものに印象をきざみつ

け、子供の性格をはなやかに又社交的にする」と云って、娘をもつ母親に幼少からの笑の習慣の必要性を教えている。

(3) 顔貌は精神の現れ

今若し大脳皮質の働き即ち精神作用が内臓や血管、腺などの働きに全然関係がないとすれば、吾々の顔貌と云うものはもっと平面的になり変化のないものとなるであろう。

吾々の顔貌は決して骨の形とか、又只肥えているとかやせているとか、或は又艶がよいとか悪いとかの条件丈で表現出来ない位色々様々の調子の変化があつて、これが為め大体同じような輪廓の顔でも千差万別の印象を与えるものであるが、かかる点に關しては精神作用の影響は普通吾々が考へているよりも遙かに高度のものである。

大脳皮質は色々な生命現象に影響を与えるものと思われる。修養の出来た人の顔貌など所謂美醜を超えた美しさのあるのや又反対に如何に外面を飾つても、心のきたない人には表情などにも自然の間に醜さの現われるのも無意識の間に血液の分布とか脂肪の分布とか、その他色々の変化が大脳皮質からの影響によって起るためである。精神病患者になるとその顔貌全体の容相が、口元から眼つき迄が如何にも精神病らしく見えるようになることは周知の如くである。

(4) 大脳皮質から見た悟りの生活と長寿の秘訣

吾々日常の色々な心配は、皆これ大脳皮質の所産である。而してこれが生命神経系に対して無影響である筈がない。心配で心配で夜もろくろく寝られないとか、悲しくて悲しくて食事ものを通らぬなどと云うが、これらは必然的に内臓や血管、腺などに悪影響を与えて生命

を縮めることになる。生命神経系の働きと云うものは、心臓にしても肺にしてもよく分るように吾々の知らぬ間に、即ち無意識の間によく調節されて寸時も休むことなく働いている。丁度水が高きより低きにつくが如く自動的に運転して行くものである。これは内臓、血管、腺などからの色々の状況を知覚神経で求心性に間脳の視床に送り、視床からこれを遠心性に視床下部に送り、視床下部から更に末梢の内臓、血管、腺に送る。

かくの如く生命神経系は直線的のものでなく循環的で、生命は周流循環してその端なきものなることがよく理解される。それで生命神経系のこの循環を他から邪魔しなければ、吾々は各々その天寿を全うするものである事も自ら明かである。か様な訳であるから長生きしようとするには、何んと云つても大脳皮質からの影響を余り変化あるものにしてはならぬ。つまりらぬことにくよくよして生命神経系の働きを邪魔してはならぬ、実際問題としてはこれには二通りの道がある。

その一つは人生のあるがままの姿を凝視し修練して、そのあるがままの姿に満足して生活すると云う聖者の生活である。苦もよい楽もよい、光と云うも暗と云うも表裏一体であるべくしてある、今日はそれ自体で感謝なのだ。こんな風な考え方になると実際人は強くなるもので、どんな事が起つてもささいだりわめいたりしないで心の平静が保たれ、更に生きることに深い恵と感謝を感じるようになるとしたら、大脳皮質からの影響というものはよい方への影響ばかりとなって仕舞う。これ所謂聖者の生活で、実際名僧高僧の生活を見ると、今日の栄養学説では半年も充分な栄養は保てないと思われるにも拘わらず、尚

且つ八十才、九十才の長寿を全うしている。

その二は大脳皮質の機能の完全に消失した精神病患者の如く、全くぼけて何にも分らないと云う患者では、大脳皮質からの妨害が加わらぬこととなり、身体の調子又は病氣以前よりよくなつたと云うが如きである。これは生命神経系の働きが人間ののなやみから解放されて、その本来の流れを静かに流れると云う点では、聖者と或る一種の精神病患者とは共通しているからである。依之飲之長生きの秘訣は前述のように一つに精神の修養にあり、人間練成にあると云うことになる。

(5) 二つの神経系、環境神経系と生命神経系

環境神経系の最高中枢たる大脳皮質は精神活動の母地であり、生命神経系の最高中枢たる視床下部は生命の根源である。神経系はその作用の上から此の二つに分けることが出来る。その一つは環境に適應して各々の生活を調節するもので、今一つは直接生命そのものの維持に必要なものである。

前者は動物神経系又は環境神経系などと呼ばれるのに対し、後者を植物神経系又は生命神経系或は自律神経系と呼ぶが、かかる表現を用うると大脳皮質は実に環境神経系の最高中枢のある処で、此処で色々の精神活動が行われる。例えば記憶とか思考、判断など、これに對し間脳の視床下部は生命神経系の最高中枢である。但しこの兩者の間には緊密な連絡があることは勿論で、吾々の精神活動が心臓の鼓動を高めたり、又前述の如く心配の余り夜もろくろ眠れないとか、飯ものどを通らぬとかよく云われるが、これらは皆上述の關係を物語る好例である。

この場合大脳皮質は生命神経系の最高中枢の視床下部に対しては特別の情報の提供部で、一種の末梢神経系と云うべきである。只見れば少しくろずんだ豆腐のようにしか見えない、或いは又大きなマカロニでも並べたかのようにしか見えない大脳皮質が、最高度に進化した百四十億余りの神経細胞の居処であり、この神経細胞は肉眼でこそ見えないが、普通の光学顕微鏡で明かに見える物質的存在である。この神経細胞の働きによって総ゆる感覚も又総ゆる運動も行われ、更に又吾々人間にあつては高度な精神活動まで行われることとなるのである。即ち神経細胞と云う生命をもつた物質の働きによって、終には無形の精神界へ通るのである。

尚この大脳皮質の表層は知性の座であり、深層は感情の座であると云われる大脳皮質は略十層位ある。上述の表層と云うのは大体表面の五層位で、深層はそれ以下の層を云うのである。

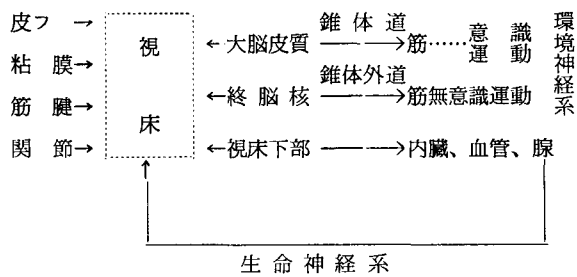
生命神経系の一般 生命は色々の形をとって現われる呼吸とか消化とか排泄とか分泌とか、更に又成長とか生殖とかの色々の面がある。

而してこれら個々の事実は、今日でもある程度どこまでも或る程度迄物理化学的に説明は出来るが、さて総括された生命と云うことになるとそう簡単には行かぬ。このような形をとって現われる生命と云う一つの不思議な現象の本態的把握に関しては、古来幾多の科学者によって懸命の努力がなされたにも拘わらず、今日と雖も余り前進していない。

吾々は母親の胎内に宿った瞬間から、一つの生命としてその存在を続けているのであるが、この生命の火はその燃料さえ与えておけば、

思想

何んの考慮を払わなくとも独りずに自然に燃え続けて行くものである。吾々が衣食住の心配というのは、畢竟するにその燃料の提供に對する苦心に外ならないのである。



この生命現象を無意識的反射的に支配するのが、此の生命神経系なのである。図示の如く生命神経系は内臓、血管、腺等からの内部刺激を、知覚神経で脊髄の上行路を上行し間脳の視床に送り、視床はこれを視床下部に移し、ここに生じた興奮をここから遠心性に再び内臓、血管、腺などの諸器官に伝達し、これら諸器官の働きを促進又は反対に抑制するのである。

かくして吾々の内臓諸器官は独りでは何時迄も反射的に働くものであるが、これが大脳皮質二次野の精神中枢で起る色々の精神感動で屢々妨害されるために、本来の天寿を短くすることは己に述べた通りである。

間脳の視床は内外総ての知覚情報を集めて、これをそれ／＼適当な部処に送り届ける、いわば全知覚の集配所である。例えば外界からの知覚情報は普通外皮の感覚器で受付け、即ち受感し脊髄を上行して間脳の視床に達し此処からそれ／＼の部処、例えば大脳皮質一次野の感覚中枢、大脳核及び視床下部に送られ、かくして外界の複雑多岐なる

變動に対して、吾々の生命を守るための運動、身体適応が行われるのである。而してこの神経系統は上述の如く環境神経系統で、視床下部、内臓、血管、腺の系統は生命神経系と云うのである。

(6) 知覚と表現

下等動物と高等動物に於ける中枢神経系の活動を簡単に比較して見るに、最も違う点は基本的な知覚刺激そのものを受け入れることよりも、むしろこれを総合して知識に纏める点とか反応として筋運動などとして表現する点にある。

只知覚から筋への連絡する反射運動の如きものなれば、寧ろ動物は或る方面では人間よりもすぐれている。然し自然のまま生れたままで与えられていないような知的運動、例えば複雑な工作、工芸的な仕事になると即ち感覚及び筋の複雑な総合を要する仕事になると、人間が断然他の動物に優る。

これは単に動物と人間との間についてのみならず、人間同志の間にもいえる事で、例えば同じ演説を聞いても、或人は一向に面白がらぬのに他のものは非常に興味を感じるとか感激するとか云われるが、これは云う迄もなく基本的な聴覚自身が敏感であるとか否とかによるものでなく、これを受け入れる大脳皮質に於ける脳細胞（神経細胞）の総合判断などの能力の如何によるものである。即ち動物が高等でも下等でも、基本的知覚を受け入れる能力はそれ程違わないが、最も違う処はかかる知覚を工作加工、即ち総合とかそれに続く表現運動が違うのである。

さてこれら基本的知覚並びに運動に関する中枢は、大脳皮質の一次

野で一定の場所にある。即ち大脳皮質の一次野は五感の中枢及び運動の中枢のある処で、運動中枢は主として大脳半球の前中心回転に、しかも人間を逆立にしたような順に脚の中枢が最上部を占め、而して左右は反対で左脚の運動中枢は右半球にあり、右脚の中枢は左半球にある。

知覚に関しても同様、皮膚知覚の中枢は後中心回転に、聴覚中枢は横側頭回転に、視覚中枢は鳥距裂の周囲に、味覚中枢及び嗅覚中枢は海馬回転にあるが、これらの中枢はいづれも神経道によって、直接末梢の随意筋又はそれと相当する感覚器（外皮、内耳、眼球、及び舌、鼻）に連絡しているのので、丁度末梢部を大脳の表面に投影したようなものである。

従つてこの中枢は中枢としては最も下級のもので、主情知覚を知覚するに過ぎない。如斯この中枢は直接身体末梢部を大脳皮質の表面に移転したものである。

尚この末梢部との連絡に当っては、運動の場合は最小限二神経元を、知覚の場合は三神経元を必要とする。以上の投射（投影）中枢を除いた大脳皮質は、大体綜合中枢又は思考中枢で、これが所謂精神中枢である。即ち此処で色々の精神活動が行われるが、さてその精神活動（作用）と云われるものは、現在の処では極めて漠然たるもので、内容的には尚釈然しないものである。それは五感とか運動の中枢の如く、直接末梢とは密接なる連絡をもたないから実験のしようがないためであるが、然し色々の中枢からの情報を集めてこれを綜合し、思考するものなれば、投射中枢などよりも内容の複雑な最も広い意味に於

ける、吾々の思考作用とか精神作用に關しては高級の中枢位に考えてよい。蓋し精神作用の基本的な成り立ちの確定してない今日の處、止むを得ないことと云わねばならぬ。

一般に綜合中枢は前述の如く漠然たるものであるが、それにしてもその一つとも云うべき言語中枢に就ては、かなり詳しく知られているので、その大様を述べて精神作用の理解の一助としたい。

仰も言語作用は非常に複雑な機能で、広い意味では話す丈ではなく耳から聞いた言葉を理解したりする作用も、亦眼から見た文字を理解したり記憶したりする作用をも含めるものである。即ち広範の言語作用はただ精神内容の發表手段たるのみならず、重要な精神内容の獲得手段であり、同時に又その内容そのものをも包含することになるのである。従つて言語中枢は、聴覚性言語中枢、視覚性言語中枢、運動性言語中枢などはっきりとした區別がある。

運動性言語中枢と云うのは、言葉を話すに必要な凡ゆる運動を記憶し、これを支配する處で、左半球の下前頭回転の後部及びその附近にある。この中枢はブローカー氏が初めて発見したので、その名をとつてブローカー氏中枢(ブローカー氏中枢は大枢の左半球にあり、それで若し脳の出血が左に起つた場合は言語が不能になる訳である)と呼ばれている。

言葉を話す運動は口のまわりの諸筋、舌筋及び喉頭の諸筋などが協同して行なう、極めて複雑な特殊な合成運動で、食物をかんだりのんだりする運動とは全く別な運動である。食物をかんだりのんだりする運動は、前述の皮質運動中枢即ち前中心回転の下部にあるので、これ

らの運動はこの中枢が健全であれば無事に行われるが、同じ筋でもこれを言語運動に利用すると云うことになると、その組み合わせが非常に面倒になつて特別な中枢を要することとなつて来る。これが即ち運動性、言語中枢である。

而してその關係は同じ人でも仕事の性質が違つると、それ／＼特別な指導者を必要とするのと同然である。それでもしこの運動性言語中枢が破壊されると、例えば脳溢血などの場合に筋自体は麻痺してないので飲食には差支えないが、最早言葉を話すことは不可能となる。一般にこの中枢の故障で話しが出来なくなった場合を失言症と云うのである。

聴覚性言語中枢(ウェルニツチ中枢)と云うのは、耳から聞いた言葉を理解し記憶する中枢である。単に聴覚中枢と云うのは聞えたものを音として意識する文の中枢であつて、聞えたものが何であるかとかその意味を理解する能力は供えていないのである。

即ち聞くと云うことと聞いたものを理解し記憶すると云うことは、二つの別々の作用で脳に於ける中枢のある處も異つてるのである。即ち只聞く文の中対は前述の上側頭回転脊側面の横側頭回転にある所謂聴器に対する投射中枢で、聞えたものの内容を理解したり記憶したりする高次の中枢は聴覚性言語中枢で、先きの投射中枢の直ぐ後方の下頭頂葉の角回転にある。これは眼から見た言葉即ち文字を理解し記憶する中枢で、もしこれが破壊されると眼は見えてるので盲ではないが話すことは出来なくなる。それでこれを言語盲又は視覚性失言症と云うのである。全然文字を知らない人又は知らぬ外国語に対し

ては、この視覚性言語中枢はあれどもなきものと同様である。

以上の如く吾々が言葉を話すためには、色々の中枢があつて非常に複雑な動作であるが、要するに第一次中枢は主情知覚を知覚し、その上に第二次の識別中枢があり、更にこれらを綜合する所謂第三次の中枢があるものと思われる。即ち第一次は基本知覚で第二次は識別、更に第三次は綜合中枢と漸次高次の中枢があつて、初めて言葉が完全に話せるものと思われる。

今脳全体を中央政府にたとえれば、五感の中枢は凡ゆる内外の情報の受附掛りで、運動中枢は命令の發送係である。五感の中枢で身体末梢からの情報を集め、これを最高主能部たる大脳皮質二次野の思考中枢(精神中枢)の方へ運び、此処で凡ゆる方面からの情報を基礎にして一定の方針を確定し、即ちここで精神内容が決定され、これを皮質一次野の運動中枢に送り此処から実行運動命令が発せられ、身体の反応が行動となつて現われるのである。

(7) 二つの生命—生物学的生命と生理学的生命

その一つは生物学的生命で、これは昔から人生五十と云われた人の寿命で、吾々人類も生物である以上必ず死なねばならぬ。数年前迄は吾々日本人の寿命は平均寿命として余り長命ではなかつたが、最近に至り世界の長寿国と云われる北欧の、スエーデン、ノルエー、デンマーク更には和蘭西、スイス等と肩を並べ、国民の平均寿命は已に七十の大大を超えている。しかもこれは今後共医学の發展に伴い、一般国民の衛生思想の向上に伴つて、更にその年齢を引き上げ得る可能性は充分にあるものと思われる。然し前にも云つた通り、吾々も生物であ

る以上はいつれは死なねばならぬ。

先づ平均寿命としては百才を超すことは相当六ヶ敷ものとせねばならぬ。この事に関してはよく人の寿命は百廿五才と云う者もあるが、これは計則的のもので、生物の寿命は計則的にはその成長期の略五倍であると云うが、今若し吾々人間では生れて廿五才迄を成長期とすれば、その五倍の百廿五才迄は生きる可能性はあるものと云へるであらう。反之今一つの生命の生理学的生命は、吾々人類の脳の働き即ち精神活動より観たる生命で、これこそ人類としては眞の生命とも云うべきものである。何故なれば、吾々人類が自らを万物の靈長として万物に君臨する所以は、吾々人類ではその脳が最高度に發達してよく、動物的存在から人間的文化的生活を獲得し得たものなれば、この生理学的生命こそ人類としての眞の生命と云わねばならぬ。吾々人類を他の生物から區別するには、人類はその眞の生命である生理学的生命をもつことで他の生物と區別出来ると云つてもよい。

而してこの生理学的生命はその人が偉大なれば偉大なる丈なるもので、例えばキリストにしろ釈迦にしろ、彼等の生物学生命は既に數千年前に消滅しているにも拘わらず、彼等の脳の活動は數千年後の現在の全世界人類の脳裏で、キリスト教なり仏教となつて盛んに活躍している。尚この活動は今後共人類が此の世に存在する限り無窮に続くものと思われるが、これは何もキリストや釈迦が今実在している必要はない。吾々の脳の働きがキリストや釈迦の嘗ての精神活動に感受性をもつからである。脳の働きは超時間的超空間的のもので、互に感受性を有するものなれば、かくの如き観点からすれば、吾々は肉体の健

全なる事もさることながら、それにもまして精神の修養に一層の努力を払わねばならぬことを強調して筆をおくことにする。

思
想

九